

<ぶどう（デラウェア施設栽培）>

- ・「おおさかアグリメール」で配信している、年間の主な作業を掲載しています。（気候条件等で前後することがあります。生育状況に応じて管理してください。）
- ・病害虫の発生は栽培ほ場の状況を良く観察し、毎月の病害虫発生情報は <https://www.pref.osaka.lg.jp/ol20090/nosei/byogaicyu/index.html> を参照してください。
- ・防除薬剤は『大阪府農作物病害虫防除指針 https://www.pref.osaka.lg.jp/ol20090/nosei/byogaicyu/boujo_shishin.html を参照してください。

月	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
旬	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下			
加温	温湿度管理			病害虫防除	処理 ジベレリン			病害虫防除							収穫				棚の清掃				病害虫防除	土づくり		元肥						せん定	休眠打破	地温管理		
無加温								処理 ジベレリン	病害虫防除		果房管理	除草		新梢管理		収穫															せん定					
加温栽培の管理作業	【温湿度管理】 ▼土壌が乾燥すると萌芽しにくくなるので、十分にかん水します。萌芽まではハウス内を乾燥させないようにし、枝にもかん水しましょう。▼日中は25～30℃程度、湿度を90%以上にし、夜温は17℃程度に保ちます。 ▼発芽期は10日間程度温度を下げて発芽をそろえましょう。日中は23℃以上にならないようにします。 ▼発芽がそろった後は、夜温をやや高めにして、生育を促進させます。曇雨天が続く場合は、夜温を13℃程度とやや低めにして軟弱徒長を防ぎましょう。			【病害虫防除】 ▼新芽や新葉を食害するヨトウムシ類の発生に十分注意しましょう。 ▼灰色かび病の予防には展葉7～8枚期から幼果期まで、ビニールマルチをすると効果的です。 【ジベレリン処理】 ▼ジベレリン処理適期は、ハウス内温度、樹勢等により異なります。 ▼高温が予想される場合は、処理遅れにならないよう早めに処理しましょう。 ▼ぶどうの結実数は開花後一週間で決定します。花ふるいを防止するため、開花前の摘芯・副梢除去や開花・結実期の低温管理（夜温10℃以下）を行いましょう。			【病害虫防除】 ▼モヤの発生しやすい園は、灰色かび病の発生に注意しましょう。湿度を下げるための加温機の送風運転や展葉7～8枚期から幼果期までのビニールマルチをすると効果的です。 ▼ケムシ類、ヨトウムシ類、ミノムシ類の発生にも注意が必要です。加温栽培では、加温機周辺の葉にハダニ類が発生していないか確認しましょう。						【収穫】 ▼加温栽培では着色が先行し、酸の減少は遅れがちになります。着色に惑わされことなく、食味重視を心掛けて収穫しましょう。						【棚の清掃】 ▼収穫の終わった園では、残っている果房を取り除き、棚をきれいにしましょう。						【土づくり】 ▼石灰資材を10a当たり100～150kg程度施し、土壌pHが6.0～6.5になるようにします。 ▼ぶどう栽培の基本は、土づくりです。牛ふん堆肥やバーク堆肥を投入し、土づくりに努めます。部分深耕や中耕も有効です。 【病害虫防除】 ▼べと病、さび病、フタテンヒメヨコバイの発生に注意します。			【元肥】 ▼10a当たり成分量で窒素8kg、リン酸10kg、カリ6kgを施用します。			【せん定】 ▼枝先が枯れている枝は、病害虫の発生源となる恐れがあるので、枯れていない部分まで切り戻してせん定しましょう。 ▼せん定後の枝はほ場外に持ち出して処分します。 ▼結果母枝数は1平方メートル当たり3～4本残します。			【休眠打破】 ▼年内被覆の場合、シアナミド剤の使用は、12月下旬～1月上旬(被覆後20日が目安)に使用します。 【地温管理】 ▼根の活動を促して発芽後の生育不良を避けるため、ビニール被覆から加温開始までの期間を長くとり、除草を行い、すみやかな地温上昇に努めましょう。 ▼加温は、地温13℃を目安に開始します。▼発芽には十分な水分が必要です。ほ場の乾燥にも注意しましょう。		
無加温栽培の管理作業							【ジベレリン処理】 ▼処理適期は、ハウス内温度、樹勢等により異なります。高温が予想される場合は、処理遅れにならないよう早めに処理しましょう。 【病害虫防除】 ▼雨が続くと灰色かび病、褐斑病、黒とう病が発生しやすくなります。ハウスを開放して湿度を下げ、予防的に薬剤散布を行いましょう。 ▼ヨトウムシ類、ケムシ類、アカガネサルハムシなどの害虫が発生していないか、こまめに園を見回って確認しましょう。			【果房管理】 ▼落花後着粒を確認したらできるだけ早く摘房します。早めに摘房を行えば、果粒肥大や着色促進に有効です。 【除草】 ▼果粒肥大期の土壌水分不足は、収量減の原因となります。かん水や早めの除草が果粒肥大に有効です。			【新梢管理】 ▼開花後1ヶ月たっても新梢が自然に止まらず伸び続けると、果実の肥大や着色に影響します。 ▼強く伸びている副梢の除去や再誘引を早めに行いましょう。急激な副梢管理は避け何回かに分けて行い、棚下に2割程度光が入るようにしましょう。 ▼着色初期に強い摘芯や新梢の除去を行うと、着色障害の原因となるため軽度で止めましょう。															【せん定】 ▼枝先が枯れている枝は、病害虫の発生源となる恐れがあるので、枯れていない部分まで切り戻してせん定しましょう。 ▼せん定後の枝はほ場外に持ち出して処分します。 ▼結果母枝数は、1平方メートル当たり3～4本残します。								